

報告

吉里吉里忌 2019

講演

- ・わが心のドンガバチョ
井上ひさし先生こんにちは
- ・井上芝居とわたし



地域おこし協力隊活動レポート たまげた
004
MARCH 2020
2020年3月31日(火)発行 第4号 発行:遅筆堂文庫 編集:林 俊宏
川西町フレンドリープラザ 〒999-0121 山形県東置賜郡川西町大字上小松 1037-1 TEL:0238-46-3311 / FAX:0238-46-3313

2019.12 - 2020.12

井上ひさし展 2020 スタンプラリー

3館以上まわって
井上ひさし特注原稿用紙を
もらおう!!

遅筆堂
文庫
2019年 12月~
2020年 12月

吉野作造
記念館
2019年 12月~
2020年 12月

市川市
文学ミュージアム
2020年
7月18日~9月6日

仙台
文学館
2019年 12月14日~
2020年 4月5日

世田谷
文学館
2020年
10月10日~12月6日

鎌倉
文学館
2020年
4月18日~7月5日

主催：井上事務所 / 遅筆堂文庫
共催：仙台文学館 / 鎌倉文学館 / 市川市文学ミュージアム / 世田谷文学館 / 吉野作造記念館

井上ひさし没後十年となる二〇二〇年。
ゆかりある六館で、一年に渡り催される企画展を
巡るスタンプラリーです。

お問合せ

井上ひさし展 2020 スタンプラリー特設サイト
URL <https://stamp.inouehisashi.jp/>

お問合せ

遅筆堂文庫 (川西町フレンドリープラザ内)
Tel. 0238-46-3311 Mail. info@kawanishi-fplaza.com
〒999-0121 山形県東置賜郡川西町大字上小松 1037-1

井上ひさし研究会が発足しました。

井上ひさし関連の講座・講演・企画展・研究発表や出版・舞台公演などの情報の発信を目的とした「井上ひさし研究会」の設立総会が吉里吉里忌（四月十四日）の午前に開催され、今村忠純さん（大妻女子大学名誉教授）を会長に選任し、正式に発足しました。



設立総会の様子

井上ひさしは、文学や演劇のみならず、地理、歴史、農業、医学、環境、憲法、そして、音楽、スポーツに至るまで、ありとあらゆる資料を収集し、読み込み、発信しました。これらを研究するには、多くの方々の参加が必要です。研究会では、さまざまな方向からの研究を通して見えてくる、井上ひさしという作家の全体像を皆さんで共有し、広めていきます。
（研究会関連イベントについては七ページで紹介しています）

井上ひさし研究会 会員募集中

井上ひさしの本を読んだ、あるいは井上芝居を観たことがある方ならばどなたでも入会できます。入会ご希望の方には資料をお送りしておりますので、フレンドリープラザまでご連絡ください。
（連絡先は11Pに付記）

CONTENTS

目次

- 03 吉里吉里忌2019
講演「わが心のドンガバチョ」
井上ひさし先生こんにちは」
講演「井上芝居とわたし」
生活者大学校
テーマ「社会における公平とは何か」
- 06 吉里吉里忌ブレ企画
烏兔沼佳代講演会
「教科書で読んだ井上ひさし」
井上ユリ イタリア料理教室
お知らせ
- 07 井上ひさし研究会のページ
文学サロン「文学教しの中の「握手」」
三学会 合同国際研究会
パネル発表 ロジャー・バルバース講演
「井上ひさしー世界との対話」
井上ユリ、ロジャー・バルバース
対談「井上ひさしと過ごした時間」
- 08 運筆堂文庫二〇一九年度企画展
「日の浦姫物語」著作資料展
井上ひさしと「面白半分」
- 09 学芸員ノート／追悼 中村哲さん
- 10 イベント紹介
青年海外協力隊OBが語る、チヨコレイト
だけじゃないガーナの話
一箱古本市ブレイイベント
「雑誌からみる地域文化」
表紙の写真
- 11 コラム 地球の中心 世界の片隅
運筆堂文庫利用案内
- 12 井上ひさし展スタンプラリー案内

朗読倶楽部「星座」による群読

昨年の吉里吉里忌をきっかけに発足した朗読倶楽部によるオープニングアクト。「イーハトーボの劇列車」の終盤部分を演じました。



特集

吉里吉里忌 2019

ふるさと・川西町で井上ひさしを偲ぶ文学忌「吉里吉里忌」5回目となった今回も盛りだくさんの内容でお送りいたしました。



「天神の森合唱団」による合唱

閉会式では、井上ひさし作詞の「ひとりじゃない」を歌いました。「ひよっこりひよたん島」で使用された曲で、こまつ座公演「太鼓たたいて苗ふいて」の劇中歌にもなっています。

講演

「わが心のドンガバチヨ 井上ひさし先生こんにちは」



第一部の講師は作家の若竹千佐子さん。文芸評論家の池上冬樹さん聞き手に迎え、「ひよっこりひよったん島をはじめとする井上作品への思いや、芥川賞受賞作『おらおらでひとりいぐも』について、出身地である遠野の言葉についてなどを語っていただいた。

若竹さんと「ひよっこりひよったん島」の出会いが小学四年生のときだった。「説教臭さがなく、人間の肉声、本當の気持ちを子どもにもわかるように伝えてくれる番組であり、いろいろなことを教えてくれる学校のようなものだった」と当時を振り返った。心の中のドンガバチヨに「まだ大丈夫」と励まされたおかげで、現在まで小説を書き続けることができたという。この他にも「お金を数えるときは一ガバ二

ガバ三ガバ：（と数えてしまおう）」など、若竹さんの「ひよっこりひよったん島」への愛が随所から伝わってくる講演となった。

また、若竹さんは、遠野の「もじよやな」(無情だ)「とでな」(尊い)などの奥深い表現を例に挙げ、「先祖代々積み重ねてきた文化で、滋味のある、やさしくて誇り高い言葉である。なくさずに使って、次の時代にも繋げられるよう、残していきたい」と方言に対する熱い思いを語られた。

前日の前川さんの講演で挙げた個人主義の話題に関連して「おらおらでひとりいぐも」について「自分の一生を、他人に左右されず、自分の意志で生きていくという心意気を『おらはおらに従う』と表現したが、それが一番言いたいこと」と述べられた。

今後は、井上ひさしの「化粧」のような、女性が主人公で一人語りの劇風のものを書いてみたいとのこと。

講師紹介

若竹千佐子 (わかたけ・ちさこ)

1954 (昭和29) 年岩手県生まれ。岩手大学教育学部卒。55歳から小説講座に通い始め、『おらおらでひとりいぐも』で第158回芥川賞受賞。

池上 冬樹 (いけがみ・ふゆき)

1955 (昭和30) 年山形市生まれ。立教大学卒。週刊文春、朝日新聞、東京新聞、産経新聞などに書評やエッセイを執筆中。各文学賞の下読み・予選委員を多数担当。文庫解説は400冊を数える。

二〇一九年四月十三日(土)

テーマ

「社会における 公平とは何か」



今回は、元文部科学省事務次官の前川喜平さんと生活者大学校教頭の山下惣一さんをお招きし、現在の政治が抱える問題などについて語っていただいた。

冒頭、前川さんは、「ひよっこりひよったん島」の挿入歌である、サンデー先生の「勉強なさい」とドンガバチヨの「未来を信ずる歌」を披露された。

前川さんは、現在、行政が政治を付度する場面が多いことを、具体例を挙げつつ指摘された。また、行政だけでなく、メディアや教育など、権力の影響を受けるべきではない領域でも付度が行われている現状を「付度ファシズム」と表現された。こうした現状の根底にあるのは、日本人の「個」の

弱さであるとして、明治以降の歴史的経緯について話された。

明治期に成立した国体思想において、最も強く否定されたものが個人主義である。全体を優先し、個を否定する思想は、現在も学校や社会の中に根強く残っており、教育勅語を復活させようという動きはその一つの典型であると危惧された。

また、憲法について「国民が国家に課した規範であると同時に、国民同士の価値観の申し合わせでもある。憲法が最も大事にしているのは個人の尊厳であり、それをお互いに認め合うことが大切である」と話された。

前川さんが指摘された個の弱さについて、山下さんは、田んぼの水を共有財産として管理しなければならぬ農村社会に原因があるとの見解を述べた。

その後、山下さんの講座は前川さんに対して質問を行う形をとり、客席との質疑応答も前川さんが中心となって進められた。憲法の改正案や道德の教科化の問題点、加計学園問題の経緯など、丁寧に回答いただいた。

講演

「井上芝居とわたし」



第二部では、俳優の角野卓造さんをお招きし、演劇ジャーナリストの今村麻子さんがインタビューを行う形で、井上作品に出演したときの思い出などを語っていただいた。

最初の出演作である「黙阿彌オペラ」については「(途中までの台本を読んで)これは絶対良い芝居になると確信した。当初予定していた初日には間に合わなかったが、台本が書き上がるまでは絶対降りないと宣言した」と、遅筆ながらもエピソードを紹介いただいた。

角野さんは井上芝居において初演と再演の両方を経験している。「初演の舞台は、台本が間に合うか、それを覚えられるかといった不安や苦しみが常にあるが、その分上演できたときの喜びも大きかった。井上芝居は、こうした他では味わえない苦難を乗り越

えてようやく実現するものであり、再演の際はそのようなスリルが味わえないため物足りなく感じる」とのこと。

また、角野さんは、井上芝居を「演劇についての演劇」と表現し、「芝居とは、劇場とは何かという問いを客席と一体となって考えるものである。劇場で同じ時間空間を共有するということではないかと、自身の考えを述べられた。

この他にも、栗山民也さんと鶴山仁さんの演出方法の違いや、妻である倉野章子さんとの馴れ初め、近藤春菜さんの「角野卓造じゃねーよ」のおかげで苗字を「かどのさん」と正しく読んでもらえるようになった話など、さまざまなエピソードをユーモアたっぷりに紹介いただき、会場は笑いの渦に包まれた。

講師紹介

角野 卓造 (かどの・たくぞう)

1948年、東京都生まれ。文学座所属。舞台を中心に、テレビ、映画、吹き替え、ラジオと幅広く活躍。井上作品の舞台出演は、「黙阿彌オペラ」(1995年初演、1997年・2000年再演)、新国立劇場「夢の裂け目」(2001年初演、2010年再演)「夢の泪」(2003年初演)「夢の痕」(2006年初演、2010年再演)、「円生と志ん生」(2005年初演、2007年再演)。

講師紹介

前川 喜平 (まえかわ・きへい)

1955年奈良県生まれ。東京大学法学部卒業。元文部科学省事務次官。現在自主夜間中学スタッフ。著書「面従腹背」など。

山下 惣一 (やました・そういち)

1936年佐賀県生まれ。農業に従事しながら、小説、エッセイ、ルポルタージュなどの文筆活動続ける。生活者大学校教頭。著書「井上ひさしと考える日本の農業」など。

井上ひさし研究会 イベント報告

井上ひさし研究会として初の川西町でのイベントとなる文学サロンが開催された。馬場さんが「文学殺し」と過激なタイトルを付けられたのは、文科省が二〇一八年に告示した学習指導要領（高校国語科）の内容を危惧されたこと。国語の選択科目を「論理国語」と「文学国語」としたことで、生徒は受験に有利な論理国語を選択するようになり、ますます文学離れが進むのではないか。高校教育は文学をないがしろにしつつある、との指摘がなされた。

後半は、国語の教科書にも掲載されている井上ひさしの作品「握手」を例に、文学研究の手法や、井上作品の持つ言葉の力について解説いただいた。馬場さんは、文学研究は「つまり〜」が大事であるとして、文章の中の細かい表現に対して何故その言葉なのかを考えながら読む、それを突き詰めていくことで研究が進められると述べた。



日時／2019年11月10日 午後2時～4時
場所／川西町フレンドリープラザホール舞台上
講師／馬場重行
米沢女子短期大学国語国文科教員

文学サロン 「文学殺しの中の『握手』」

ロジャーさんが日本の芝居でも面白かったのは寺山修司と井上ひさしの芝居だったとのこと。最初に観たのは「道元の冒険」。ユーモアあり、風刺あり、権力に媚びない芝居でセリフのうまさにも感動した。井上さんはしばしばシェイクスピア、チェーホフ、プレヒトなど外国の作家と比較される。いずれも似た要素はあるが、特にチャールズ・ディケンズによく似ていると思う。しかし、日本も含めて比較すれば宮澤賢治に最も似ている。言語的にみても、賢治のリアリズムや大きなメッセージ性などがとてもよく似ていると思う、と話された。

ロジャーさんは駄洒落を連発。会場は終始笑いの渦で、あつという間の二時間だった。ロジャー氏は「まだまだ話し足りない」とのこと、ぜひまた。



日時／2019年11月24日 午前10時～12時
場所／共立女子大学3号館
講師／ロジャー・バルバース
司会／成田龍一（日本女子大学教授）
発表／「運筆堂文庫のあゆみ」研究会事務局

ロジャー・バルバース

NY生まれ。ハーバード大学大学院で修士号を取得。世界各国に留学。76年オーストラリア国立大学赴任中、井上ひさしを客員教授として招くことに尽力。日本、オーストラリア、ヨーロッパを歩きながら小説、戯曲、脚本の執筆、映画監督、演出家、大学教授等、多方面で活躍。著書に『驚くべき日本語』（集英社インターナショナル刊）井上ひさしの翻訳『わが友フロイス』等がある。

三学会（日本近代文学会、昭和文学会、日本社会文学会） 合同国際研究集会 パネル発表 ロジャー・バルバース講演 「井上ひさし―世界との対話」

前日にローマ教皇の来訪があった上智大学での開催。冒頭に上智大学副学長からの挨拶があり、開会。ロジャーさんの軽妙な語り口ながら本質を突いた井上文学の魅力と、井上ユリさんの日常から見る作家の姿を、時間半に亘って語られた。共に井上ひさしさんの大ファンだったことが出逢いの始まりのこと。ロジャーさんにとっては、宮澤賢治による想いが井上さんと同じだったこと、そして賢治そのものを彷彿とさせる井上さんの文体や考え方に魅かれたという。ユリさんは、井上さんは人には興味があったけれど、美しい景色だからあそこに行こうなどという人ではなかった、また普段からアルコールを口にできなかった、なぜなら本を読んだり、書いたりすることができなくなるから…など日常から垣間見える作家の姿を語ってくれた。時代を超えて残って行くだろう作品について二人の作品談義も。夕方からの講座にも関わらず、予定していた会議室は満席。急ぎ椅子を運び入れる一幕もあった。



日時／2019年11月27日 午後6時～7時30分
場所／上智大学2号館1702
講師／井上ユリ、ロジャー・バルバース

井上ユリ、ロジャー・バルバース対談 「井上ひさしと過ごした時間」

吉里吉里忌プレ企画

烏鬼沼佳代講演会 「教科書で読んだ井上ひさし」

十一月一日、川西町立川西中学校創立記念式典の後に、烏鬼沼佳代さんによる講演会が開催され、全校生徒と先生合わせて約四百人が聴講した。烏鬼沼さんは、中学三年生で使用されている教科書のうち三社に「握手」が掲載されていること、その中には、井上さんの数々のメッセージが込められていることなどを紹介された。そして、作中の「困難は分割せよ」という教えや、川西中学校校歌（井上ひさし作詞、宇野誠一郎作曲）の「めあてはひとつ人らしき人」というフレーズは、これからの皆さんの人生への応援メッセージであると話された。



烏鬼沼佳代（うとぬま・かよ）
編集者。山形県生まれ。「the座」（こまつ座）、「井上ひさし短編中編小説集成」（岩波書店）、「完本寺内貫太郎一家」（新潮社）などの編集に関わる。

井上ユリ イタリア料理教室

川西町農村環境改善センターで、井上ユリさんによるイタリア料理教室が今年も開催された。今回のメニューは「ジャガイモの「ヨッキ」」「鶏肉と野菜の蒸し煮」「アイスクリームのアフォガート」の三品。アフォガートとはアイスクリームに熱々のエスプレッソコーヒーをかけたもので、井上ひさしさんの好物であった。参加者からは「ささく家でも作ってみたい」「山形にいながらイタリア旅行気分が味わえた」などの感想をいただいた。また「骨付き肉の関節を切る際には、骨と骨の繋ぎ目にある筋を探すと楽に切れる」など、役に立つテクニックも教えていただいた。



吉里吉里忌 2020

開催中止のお知らせ

平素よりご支援いただいておりますことに感謝申し上げます。この度、実行委員会は新型コロナウイルス感染症への十分な対策を取ることが難しいと判断し、「吉里吉里忌2020（吉里吉里忌及び運筆堂文庫生活者大学校）」を中止することにいたしました。楽しみにされていた多くの方々に、ご迷惑をおかけしますが、ご理解賜りますようお願いいたします。

なお、今年は井上ひさし没後10年の節目に当たることから、記念の催しを検討しておりますので、決定次第お知らせいたします。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

吉里吉里忌実行委員会 実行委員長 阿部 孝夫

没後10年企画

井上ひさし作品を読む

没後10年となる2020年に
山形県内の図書館20館で、
「井上ひさし著作本展示コーナー」
が設けられます。

詳細は各図書館へ
お問合わせください。

運筆堂文庫

（川西町フレンドリープラザ内）

山形県東置賜郡川西町大字上小松 1037-1
電話：0238-46-3311
メール：info@kawanishi-fplaza.com

写真：佐々木隆二

互いに寄りかかって

生きている日本人

「日の浦姫物語」は、井上ひさしが一九七八（昭和五三）年に、文学座と杉村春子のために書き下ろした戯曲。これを書く動機となったのは、児童養護施設で聞いた「グレゴリウス一世の一生」の話だったと井上は言う。兄と妹との情交、母と子の結婚は、少年から青年になろうとしていた若き井上にとっては強い衝撃だったのだろう。

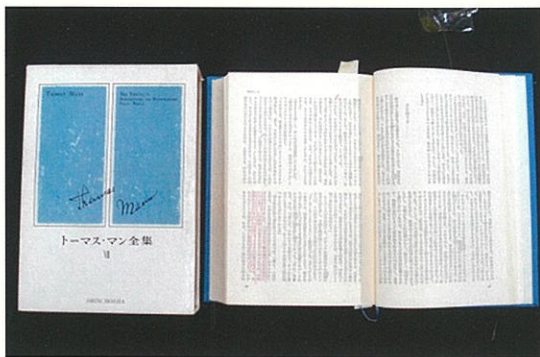
後年、グレゴリウス伝「選ばれし人」〔トーマス・マン全集Ⅶ〕収録 新潮社刊〕を読んでこの衝撃はさらに増幅され、加えて「古事記」や日本の古典にも近親相姦を描いた説話が多くあることに気づいたという。

企 画 展 I

「日の浦姫物語」
著作資料展

会期：2019年8月26日(月)～10月27日(日)

狭い国土に身近な人たちが家族のように寄りかかって生きて
いる社会、日本人特有のものの見かたや
考え方が、社会全体の
のあやうさを生み出
しているのではない
か：井上はそれを近
親相姦という衝撃的
な構図を使って描い
た。



「グレゴリウス一世の一生」が掲載されている「トーマス・マン全集Ⅶ」1976年 / 新潮社刊 いたるところに赤い線が引かれている。



演劇雑誌「新劇」1978年6月号に掲載された初演広告

遅筆堂文庫

二〇一九年度 企画展

編集長

井上ひさし



井上編集長時代の「面白半分」全12冊 (1975年1～6月号、1979年1～6月号)

かつて、吉行淳之介、野坂昭如、開高健ら有名作家が編集長を務めて話題となった月刊誌がある。その名は「面白半分」。
井上はこの雑誌で二度編集長を務めたことがあり、二度ともテレビに関する企画を中心に据えた。放送作家としての経験を活かし、テレビについて多様な観点からスポットを当てようと試みた誌面となった。
NHKの受信料の集金人など、テレビに関する様々な職業人に密着取材した「テレビを裏から支える人たち」、ある放送局の一日のCMをひたすら文字起こしした「テレビCMまる一日」などのユニークな企画や、山元護久、熊倉一雄ら井上と親交の深い人物による連載が特徴的であった。
ひげを剃りながら企画を考えることに熱中するあまり、あごを切ってしまったエピソードなど、作家、劇作家とはまた異なる、編集長としての井上の一面を垣間見ることができる。

企 画 展 II

「井上ひさしと面白半分」

会期：2019年11月1日(金)～
2020年2月2日(日)



学 芸 員 ノ ー ト

井上ひさしさんの「トサの五本締め」

遅筆堂文庫 学芸員 遠藤 敦子



井上ひさし研究会が立ち上がった一年が経つ。この会は会員の方にも研究の一部に關わっていたという趣向もある。そこで一つ関わっていたきたい課題がある。

井上さんは生活者大学の最後を「土佐の五本締め」で締めていらした。通常行われる「五本締め」ではなく、始めに両手の人指しで行い、次に中指を加え、薬指を加えて…と順に指を加えていって最後は両手の掌、指総出で盛大にパ・パ・パン、パ・パ・パン、パ・パ・パンと打ち鳴らす。次第に音が大きくなるので盛り上がり景気のよい締め方となる。

井上さんが亡くなられて数年後、高知県で全国文学館協議会の研修会があった。翌年は遅筆堂文庫が研修の場ということになっていたこともあり、懇親会で「最後は遅筆堂文庫さんに締めていただきます」と指名された。私は意気揚々と「では高知県ですの、井上さんがいつもやっていらした、土佐の五本締め、で締めさせていただきます」と言った。が、高知県立文学館の方全員が不思議そうな顔をなさっている。あれ？どうした、こは土佐だよ…えっ間違ったか…としばし呆然となり締められない。我に返って、井上さんの「土佐の五本締め」の話をしてみるがそんな締めは聞いたことがないと仰る。「でも締めたかったのでお願いします」と半ば強制的に説明しながら「トサの五本締め」をしてもらう。「トサ」とはどこさ…。帰り際に青森から出席していた学芸員さんが「その締め方は昔、港町の漁師さんたちがやっていただけと聞いたことがあります」と仰る。港町…どこの…全国の…。

昨秋、津軽に行く機会があり十三湖に立ち寄った。昔この港を「トサみなと」と呼んでいたという。「トサ」もしかして「トサ」とはこの「十三(トサ)」のことか。青森の学芸員さんが言ったこともちらつく。そこで地元の人と考える人に片端から聞いて回った。が誰も「トサの五本締め」は知らないという。これはもう研究会に持ち込むしかない。

研究会の皆さま、いえ会員に限らず全国の皆さま「トサの五本締め」について何か情報はありませんか。心当たりがありましたらご一報をお待ちしております。

井上ひさし研究会事務局

追悼 中村 哲さん

井上ひさしさんとの関わりから

二〇一九年十二月四日、医師でありアフガニスタンで活動するNGO「ベシヤワール会」の現地代表で医師の中村哲さんが、アフガニスタン東部のジャララバードで銃撃され、亡くなられた。

井上さんは、ベシヤワール会の会員として、中村さんの活動を長年支援していた。入会のきっかけは、中村さんの著書『医者 井戸を掘る』(石風社、二〇〇一年)を読んだことだった。二人が初めて出会ったのは、二〇〇一年十一月、アメリカ同時多発テロ後の米軍によるアフガニスタン空爆を考える現地報告会で井上さんが司会を務めたときだった。

その翌日、置賜農業高校の創立百周年記念講演で、井上さんは中村さんを、世界で最も貧しい国で、その国の人たちのために尽くしている一人の医者として紹介した。

講演「世界の真実と中村哲さんのこと」

ある時、中村さんたちのグループは、子どもたちが次々に亡くなる原因は水不足であることに気づいた。井戸を掘るべきか、医療行為に専念すべきか。議論の末、中村さんたちは、医療行為を続けながら井戸を掘る活動を始めることに。

井上さんは、中村さんたちの、現地の人々と協力して井戸を掘ることで医療や土木の専門家を育てる姿勢や、不発弾や戦車の残骸という人を殺す兵器であったものを、人を助ける井戸掘りに利用する知恵などを賞賛した。

そして、お金ではなく他人の役に立つことが一番嬉しいと考へ、海外で活動する中村さんのような人たちが日本の信用を高めているということを繰り返し述べた。

最後に、井上さんは、中村さんのように自分のやったことが他人から感謝されるような人になってほしいと生徒たちにエールを送った。

(講演の全文は、『ほんとうのアフガニスタン』(光文社 二〇〇二年)に掲載)

林俊宏の地球の中心世界の片隅

ペシャワール会の活動から見てくる国際協力の本質

遅筆堂文庫にて開かれた中村哲さん追悼展の様子



「医者」が「井戸を掘る」ということ

中村さんの活動において特に注目すべきところは、医者という立場にとらわれずに、自分のなすべきことを見つけ、実行したことである。専門知識や技術のある人ほど、「すべきこと」が「できること」に引っぱられ、目的を見失うことが起こりうる。中村さんの場合は「より多くの人々の命を救う」という目的がぶれず、相手との対話を欠かさなかったからこそ、自身の専門ではない「井戸を掘る」という手段にたどり着くことができたのではないだろうか。

パトロンではなく、現地が必要とすることをやる

今まさに目の前で困っている人々ではなく、お金やものを用意してくれる支援者や団体の方向けに活動してしまい、方針が崩れてしまうNGOもある。ペシャワール会事務局の福元満治さんは、先進国の人たちが喜ぶテーマとして、識字教育、女性解放、

人権問題などを挙げている。確かにこれらのテーマは支援者からの見栄えが良く、予算もつきやすいため、途上国で実施している団体も多いように感じる。

しかし、ペシャワール会の方針は「現地が必要とすることをやる」で一貫している。活動方針の決め方について、中村さんは、「厳密に言う」と自分の意志ではない」といふ。必ず相手が求めているものがある先があり、それに応えられるだけの物資あるいは資金が日本側にあるかを基準に決めていくとのこと。やる気のある人ほど、自分が良いと思った考えを他人に押し付けがちである。中村さんのように、精力的に行動しながらも、謙虚さを忘れず視野を広く持ち続けるのはとても困難なことだ。ペシャワール会が小回りのきく組織であり、中村さんを全力で支援しようという意識があったからこそ、現地の人々に真に寄り添うことができたのである。

価値観を押し付けない

支援者が喜ぶことというのは、大抵が「先進国の価値観の中で」

青年海外協力隊OBが語る、チヨコレートだけじゃないガーナの話



民族衣装を着てガーナについて語る筆者

九月十一日に、町立図書館のイベント「大人のための夜の図書館」で、青年海外協力隊として実際に生きてきたガーナの人々の生活、文化などについて紹介した。ガーナと聞いて多くの人がまず思い浮かべるのが「チヨコレート」。そのイメージ通り、ガーナはカカオの生産量が世界で二番目に多い国であり、日本に輸入されるカカオのうちの約七割がガーナ産である。

そして忘れてはならないのがガーナの地で亡くなった野口英世。彼がきっかけとなって結ばれた日本とガーナの縁は現在も続いており、出身地である福島県猪苗代町は二〇二〇年東京オリンピックのホストタウンとなっている。今回はガーナ北部の村落部での暮らしを中心に紹介した。配属先の村は、人間よりも家畜の数の多い、のどかな所であった。袋入りの飲料水や、ヤム芋(写真参照)などの特徴的な食生活や、気候、特産品、宗教など、現地での暮らしについて、写真とともに紹介した。



村落部で多く見られる土壁の家



ヤム芋の葉揚げ。右にあるソースをつけて食べる

一箱古本市プレイベント「雑誌からみる地域文化」

九月二十一日、川西町交流館あいばるで、編集者・ライター・南陀綾綾さんを迎え、「雑誌からみる地域文化」と題したトークイベントが開催された。(聞き手、田沢寺坊守見智、荒澤久美さん)

遅筆堂文庫に所蔵されている雑誌資料を、実物を用いて紹介しつつ、雑誌やミニコミ誌の魅力や奥深さに迫るトークとなった。エッセイ「雑誌と私」(聖母の道化師(中央公論社)所収)でも紹介されている「数理科学」「建築文化」「週刊ホテレストラン」などの他に、「月刊ねこ新聞」やパチンコ情報誌「王様手帖」など、一風変わった資料も紹介された。また、「先知らぬこの道を」「居路里」(童人)など、フレンドリープラザの職員や関係者がかつて編集に関わった雑誌についても紹介された。トークイベント終了後には、普段は公開されていない、遅筆堂文庫分室(同施設内)を巡るツアーも開催された。



講師紹介

南陀綾綾 (なんだろろう・あやしげ)

ライター・編集者。1967年、鳥根県出雲市生まれ。2005年から谷中・根津・千駄木で活動している「不忍ブックストリート」の代表として、各地のブックイベントに関わる。「一箱本送り隊」呼びかけ人。著書「町を歩いて本のなかへ」(原書房)、「本好き女子のお悩み相談室」(ちくま文庫)、「寛める人」(皓星社)ほか。

今年度はこんなことがありました!!

■表紙の写真■

夜のフレンドリープラザ

昨年開館二十五周年を迎えた川西町立図書館・遅筆堂文庫と劇場の複合施設、川西町フレンドリープラザです。周囲には高い建物がなく、見上げると、空がとても広く感じます。夜はとても静かで、昼間とはまた違った顔を見せてくれます。



(撮影：フレンドリープラザ職員 米野哲郎)

《編集後記》

昨年も雪が少なかったようですが、今年は年が明けても雪が積もらず、何十年も住んでいる地元の方が驚くくらいの暖冬でした。除雪をしなくてよいのは有難いことなのですが、雪国に来たという実感がわかないのは少し寂しいです。果たして来年はどうなるでしょうか。



《著者・編集者プロフィール》

林俊宏 (はやし・としひろ)

一九八八年岐阜県生まれ。映画館等での勤務の後、二〇一五年より青年海外協力隊としてアフリカのガーナ共和国に派遣。職業訓練校の生徒を対象にパソコンの使い方を教える。二〇一九年四月より川西町地域おこし協力隊・遅筆堂文庫研究員として活動。

《遅筆堂文庫利用案内》

【開館時間】

◎火・土曜日
午前九時三十分～午後七時
※冬期間(十二月～三月)
午前九時三十分～午後六時
◎日曜日・祝祭日
午前九時三十分～午後五時

【休館日】

月曜日※月曜日が祝日の場合は開館
祝日の翌日・年末年始・歳書点検期間
千九一九・〇一・二二
山形県東置賜郡川西町大字上小松
一〇三七番地

TEL/〇三三八四六三三三
FAX/〇三三八四六三三三
メール/info@kawanishi-plaza.com